

市役所で環境教育に取り組んでいる JICA ボランティアが、市役所の見学と、市が管理しているごみ処理場の見学を企画してくれました。市役所の中に、ゴミ山の写真が飾られていました。ゴミ処理場は、地上10メートルくらいのゴミ山になっているのです。その写真を「飾っている」のはおかしい、と思われるかもしれませんが、写真にはゴミ山だけでなく、そこで元気に働くおばちゃんたちが写っているのです。彼らは再利用可能なものを集めて売ります。写真のおばちゃんは、幸せそうに笑っているのです。そして白黒の写真は、そこがゴミ山であるにもかかわらず、いいえ、ゴミ山だからこそ、おばちゃんのたくましい笑顔のおかげで、私には、芸術作品に見えました。

ゴミ山は、マプト市の郊外にあります。近づくと臭いがしてきます。周辺には住宅が並んでいます。このあたりに住んでいる人たちはこの臭いが日常の臭いになっているのですね。それらの住宅は、ゴミ山が高くなる前からそこにあったのだと思います。

トラックが次々とやって来て、ゴミ山にゴミを捨てていきます。捨てられたゴミをならすブルドーザーがいます。ペットボトルや空き缶、プラスチック、生ごみ、それらがいっしょに捨てられているところから、ゴミをえり分ける人たちは、朝昼夜の3グループに分かれているらしいです。彼らの中に入って、私たちはしばらくゴミ山を歩きました。カメラを向けてもちっとも嫌な顔はしません。市役所にあった写真のように、彼らはみんな、この現実をたくましく受け入れているのだと思いました。それでも、このままでいいはずがない、という思いもふつふつと湧いて、同時に、いったい何ができるのか、という苦い虚しさを呑み込むしかないのでした。私が出したゴミも、ここに捨てられているのだと思うと複雑な思いがしました。

いつかこのゴミ山がきれいな公園になればいいのに、とのんきに思いながら、ゴミ処理場を後にしたのですが、その数日後、朝のテレビニュースで、このゴミ山が崩れて死者が出た、と言っているのを聞いて、あの日あのゴミ山で働いていた人たちの印象的な笑顔が思い出されました。2年間という短い期間ですが、私も一応、マプト市民です。だから、この問題はひとつとじゃないのです。何もできませんが、何かできないかと考えることはできます。こんな風を感じるのは、ゴミ山の見学に行ったからです。行ってなければ、ゴミ山崩壊のニュースを見ても、これほどショックを受けなかったでしょう。

私の任期も残すところ3か月となりました。前回の報告で書いたように、モザンビークの昔話をベースとして、そこに、簡単なゲームを載せてみよう、というプロジェクトをやってみたいと、去年学部長に提案しました。学部長はとっても興味を示してくれました。他の先生達にも声をかけてくれました。ショートコースとして外部からも学生を呼ぼう、とか、情報学部のティーチングスタッフに、この内容を詳しく紹介してほしい、とかいう

話も出ました。これまでもセメスターごとに、私は提案をしました。いつも、学部長はいいね、いいね、と言ってくれました。でも、いざ、実行に移そうとすると、いろいろと障害が発生して、妥協、もしくは諦める、ということの繰り返しでした。

モザンビークは南半球なので、年末年始をはさんで長い夏休みとなります。毎年2月になってから、新年度のコース時間割調整が行われます。長いお休みのあと、去年の私の提案を実行するのにどんな障害が起こるか、ある程度予想して大学へ行くと、学部長が私の顔を見て、いきなり謝るので、びっくり！　なんと、自分はもう学部長じゃないんだ、と言うのです。新しい学部長に引継ぎするから3週間くらい待ってくれ、と言うのです。これは予想外の事態でした。

学部長はクリスマスや年始に、ケータイにメッセージをくれて、その時には学部長をやめるなんて、そんなそぶりは全くありませんでした。驚いたのは、他のスタッフも学生も同じようでした。掲示板には、学部長交代のため、情報学部の授業開始が1週間遅れる、と貼り出されました。他の学校隊員に聞くと、年度はじめの混乱は何かしら必ずあるようです。だから、これも想定内と言えばそうかもしれません。

新しい学部長に、また一から説明しました。去年教えた学生の中の優秀な学生に声をかけて、ゲームプログラミングの特別コースをやることになりました。正規のコースではないこの活動に学生が興味を持ってくれるか心配していたのですが、幸い数人が参加してくれることになりました。

いざ、はじめると、例によって、教室のダブルブッキングです。急遽、空いてる部屋を探し回ることになりました。ちょうど、コンピュータールームでの授業が終わって、警備員が鍵を閉めようとしていました。そこが空いてるなら、そこを使いたい、と警備員に言うと、だめだ、聞いてないから、と言います。時間割によると、その時間は3年生のクラスが使うことになっていました。そのクラスはコンピュータを使わず、通常の講義形式の授業を、別の部屋でやっていました。その先生に、コンピュータールームを使わないなら、使わせてくれと頼むとOKだったので、改めて警備員を呼んで鍵を開けてもらいました。

大学の正規の授業を受け持ってほしいという話もあったのですが、そうすると、私がそこで教えるはずの先生の仕事を奪うことになってしまいます。だから、私の授業は空き時間にやることにしています。空き時間には、他の先生が補講を入れたり、テストを入れたりするので、時間と場所の確保が、常に問題になります。今までそれでさんざん苦勞しました。おかげで、最後のセメスターとなる今期は、そのノウハウが身に着きました。意外と空いてることの多いコンピュータールームの鍵を開けてもらうことが何回か続くと、警備員とすっかりお友達です。

簡単なゲームのソースコードを提示して、それを学生が自分で変更してくれること、それを楽しんでくれることが、この特別コースの狙いですが、そのためには、基礎的なプログラミングの能力が必要です。その能力があると判断した学生だけを選んだので、この狙い通りに進みはじめたように見えます。次の報告で、いい報告ができるといいのですが。

さて、今回も、モザンビークの昔話を紹介します。日本語クラブでリーダー的な役割を果たしてくれるロザーナが、素敵な絵を描いてくれました。「月の娘」というタイトルは、かぐや姫を連想させますが、バッファローやしまうまが出て来るところがアフリカ的です。この前の「ねずみと猟師」もそうでしたが、突っ込みどころ満載の納得できないお話です。でも、そこが面白いのかな。

月の娘

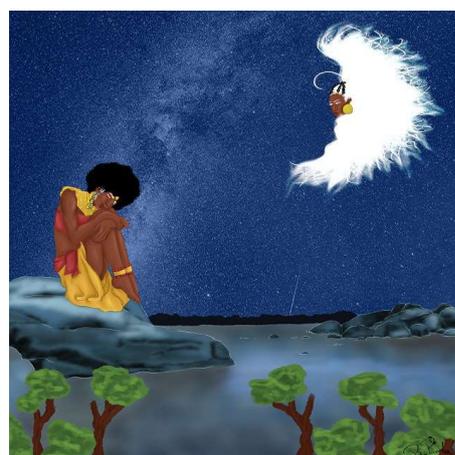
ある夜。月の娘が髪をすいていた。それを男が見ていた。

月： おまえ、そこで何をしている。

男： ああ、お月様。あなたの娘と結婚したいんです。

月： そうか。娘を絶対に働かせないと誓うなら許してやる。

男： わかりました。誓います。



男は、娘を連れて家に帰った。

男： 母さん、姉さんたち、ただいま。

母： おかえり。おや、その娘は？

男： 僕はこの人と結婚します。この人は月の娘だから、絶対に働かせないで下さい。

姉1： ええ！ 働かないでどうするの。

姉2： どうしてそんな娘と結婚するの。

姉3： 働かないなんてひどいよ！

男が出かけていない間、女たちは毎日川で洗濯をしていた。

姉1： 今日こんなにたくさん洗濯物がある。

姉2： どうしてあの娘は働かないんだ。私たちがこんなに大変なのに。

姉3： あんた、ちょっと手伝ってくれないかなあ。

娘： だめです。お母さんが働いちゃだめだって。

姉3： そんなのおかしいでしょ。ほら、こっちへ来て。手伝って。

娘： わかりました。でも、恐ろしいことが起こりますよ。

娘が川で洗濯をはじめると、川の底から大地が盛り上がり、娘を呑み込んでしまった。

姉たちは、驚いて逃げ帰った。

男： どうしたんだ？
姉1： 嫁が大地に呑まれた！
男： なんだった？
姉2： 洗濯を手伝わせたから。
姉3： こんなことになるとは思わなかったの。
男： ううん、しかたない。お月様に助けてもらおう。



男は月に助けを求めた。

男： お月様、すみません。姉たちがあなたの娘を働かせてしまいました。だから、大地が娘を呑み込んでしまいました。
月： だから、働かせるなど言ったのだ。別の夫を見つけなければ。
男： え、別の夫ですか。そんな、ひどい。

月はバッファロー、しまうま、そして亀を呼び、娘が呑み込まれた場所へ導いた。
まず、バッファローが娘に呼びかけた。

バッファロー： どうか私と結婚して下さい。
娘： バッファローは嫌いよ。あなたの角は大きすぎて怖い。
しまうま： どうか私と結婚して下さい。
娘： しまうまは嫌いよ。あなたって白黒だから。私カラフルな方がいいの。
亀： どうか私と結婚して下さい。美しいドレスとケープを約束しますから。
娘： ああ、亀さん、あなたと結婚するわ。

娘は大地から解放されて外に出てきた。そして亀と結婚し幸せに暮らした。

